

## 序

明治から現代までのわが国の近代化の歴史において、学校教育の果たした役割には非常に大きいものがある。一般的に日本という立場からすれば、国家的な制度の充実とともに、学校教育制度は極めて順調な発展を遂げて、初等教育から高等教育に至る体系が完成したといえる。しかし、私立学校のなかでも大学はこの過程においてさまざまな困難に直面し、これを克服してきた。東洋大学もその一つとして困難な道を歩みながら、社会の発展に寄与してきた。その記録が本書『東洋大学百年史』である。

東洋大学は創立百周年記念式典を昭和六十二年一月に挙行し、『図録東洋大学一〇〇年』『井上円了の教育理念―新しい建学の精神を求めて』を参列者に配布し、さらに『東洋大学百年史』『井上円了選集』『記念論文集』の刊行を決定していた。これには、当時の田中栄次理事長をはじめとする関係者の、学校法人東洋大学発展にむけた並々ならぬ意欲と決意が表わされている。

私はこの記念式典にたまたま文部大臣として参列した縁もあって理事長に就任したので、この度、右の出版物中最後の『東洋大学百年史』通史編・部局史編が刊行されたことを、ともに慶びとしたい。

本書は、右のような経過からもわかるように、単なる記念出版物にとどまらず、「正史」としての客観性と正確さを期したところに特徴がみられる。三〇〇〇頁をこえる正史の史実から多くを学び取ることは容易ではない。しかし、

私学の特徴が求められ、現代から未来に向けて「新しい建学の精神」を貫いていくには、過去の諸先輩の歩んだ道から学ぶことが必要であろう。このように、建学の精神は「従時流志不変」を旨とする現代への具体化が必要である。そして、東洋大学は百周年を転機として、新しい大学への脱皮を果たさねばならない。

現代は、民族、国家、社会、家族、個人のどれをとってみても、世界中が問題をかかえ、哲学と倫理の欠如を嘆き、自然と人間性の回復を願っている。そして、大学には個性的・創造的な役割が求められている。この時にあたり本書が刊行された。本学のみならずわが国の学校教育全般に対する本書の学問的・歴史的意義は大きいと考えられる。

最後に、本書の出版にご協力いただいた多くのかたがた、なかでも直接仕事を担当されたかたがたに、深い敬意と感謝の意を捧げたい。

一九九三年九月

東洋大学理事長 塩川正十郎